岡真理『アラブ、祈りとしての文学』みすず書房、2008年、320頁

2008年12月、ガザを実質的に支配しているハマース（正式名称は「イスラーム抵抗運動」Ḥarakat al-Muqāwama al-Islāmīya）とイスラエルとの停戦協定が期限を迎えた。それと同時に始まったイスラエル軍によるガザへの空爆と侵攻は、全世界に衝撃を与え、和平への道のりがさらに遠のいたことを示している。本書は、そのような世界的状況のもと、雑誌『みすず』に2006年12月号から2008年6月号までのおよそ1年半、15回に渡って連載された文学的エッセイに加筆・修正したものである。そして、イスラエルの建国により故郷を追われ、難民となったパレスチナ人の悲劇「ナクバ」から60年という節目の年である2008年末に出版された。

かつてサルトルはルモンド紙のインタビューで、「アフリカで子どもが飢えて死んでいるとき『嘔吐』は無力である」と、文学の自明性を否定し、その存在意義を問い直すべく挑発した。彼は困難に窮している人びとに対する作家自身の行動を問うたのである。第2次世界大戦において未曾有の犠牲者を出すなか、知識人たちは手をこまねくしかなかったのか。彼は書き手であり、知識人である作家のアンガージュマン（政治・社会参加）から問題を提起した。それを受けて著者は、イラクやパレスチナで無辜の市民が犠牲となっている痛ましい状況において、いったい「文学」に何ができるのかを自分自身に、そして「私たち」読者に問いかける。それはサルトルが投げかけた「文学」の存在意義への問いをさらに徹底させたもので、著者の執筆動機にもなっている。

著者は、現代アラブ文学研究を専門とし、文学研究のほかに、特にパレスチナ問題に関して一般向けの講演会などを多数行っている。既刊に『記憶／物語』（岩波書店 2000年）、『彼女の「正しい」名前とは何か――第三世界フェミニズムの思想』（青土社 2000年）、『棗椰子の木陰で――第三世界フェミニズムと文学の力』（青土社 2006年）がある。京都大学大学院人間・環境学研究科教授。

*

15章からなる本書の各章ごとの内容を概観するといささか長くなるが、以下の通りである。その章で中心的に採りあげられている作品名は極力、文中で挙げておいた。特に記載がなければ原著はアラビア語である。

第1章「小説、この無能なものたち」は、本書全体の基調を定める序章の役割を果たしている。出発点はサルトルの「飢えの前に文学は無力である」であり、それに対して「飢えにこそ文学は必要である」と異議を唱えることからはじまる。難民として生きるパレスチナ人たち、あるいはアウシュビッツで死を迎えようとするものたちが「文学を必要としていた」ことを例に挙げ、「文学は、人間がこのような不条理な状況にあってなお、人間として正気を保つために、言い換えれば人間が人間としてあるために存在する」（p.12）と述べる。彼女は、今ある文学を「この無能なものたち」と呼びながら、なおかつ、無力な「サバルタン」に捧げられた「祈りとしての文学」として存在価値をもつ可能性を見ているのである。

第2章「数に抗して」は、私たちがあまりにも親しんでしまった計量化の波が「人命」にも押し寄せていることに警鐘を鳴らす。「人間一個の命の希薄さ」という問題がホロコーストによって突きつけられたにも関わらず、なぜユダヤ人はパレスチナ人を抑圧し続けるのか。この逆説に対し、ユダヤ人はホロコーストによって、人間は他者の命になど無関心であるということを、身をもって体感したのだと著者は言う。当事者でさえもそうした数のシニシズムに陥ってしまう状況下で、それに対抗するのは並大抵のことではない。その対極にある命、他者への愛はどこに見出せるのか。

命の側に立つとはいかなることなのか。著者はその例をイブラーヒーム・ナスラッラーの小説のなかから引いてくる。「自分と自分たちのことだけしか考えなくなったとき、人間は自ら敗北する」(p.35)。これは『アーミナの縁結び』(2004年)中のアーミナの夫であるジャマールの言葉である。

第3章の章名「イメージ、それでもなお」が、ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン『イメージ、それでもなお――アウシュヴィッツからもぎ取られた四枚の写真――』から採られているのはある意味で皮肉である。あらゆるメディアによって「ホロコースト(ショアー)」のイメージがつくられ分有されているのと対照的に、「ナクバ」のイメージはあまりにも貧困である。「ナクバ」のイメージの欠如がもたらす記憶の非対称性は、「ナクバ」が現在進行形の悲劇であり、その悲劇を体験した者が依然として苦境に置かれていることが一因であるとする。なぜならば、出来事との時間的な懸隔がその出来事への理解を深め、そのことによって「イメージ」化することができるからである。いみじくも、ゴダールが「ユダヤ人はフィクションの主人公であり、パレスチナ人はドキュメンタリーの主人公である」(『我らの音楽[1)]』)と述べたように、パレスチナ人は自らの歴史的記憶を「眼差される側」としてしか作り得ていない。「記憶の抹殺(メモリサイド)」されている「ナクバの記憶」が命を持つためには「イメージ」を作り出すこと以外にはないが、現在のところ、その例は少ない。ガッサーン・カナファーニーの小説はその稀有な例である。

第4章「ナクバの記憶」は自らがパレスチナ移民であるガッサーン・カナファーニーの三著作、『悲しいオレンジの実る土地』(1958年)、『ラムレの証言』(1956年)、『まだ幼かったあの日』(1969年)を中心に記述されている。カナファーニー3作品のいずれも、わけのわからぬまま必死に逃げ惑い難民となったパレスチナ人が「少年」で象徴される。前2作が少年の視点から描かれている(回想)のに対して、「ナクバ」から20年目に発表された『まだ幼かったあの日』では、少年の経験した不条理な出来事がベンヤミンの言う「歴史の天使」の視点から描かれているという。小説末尾で少年の死が暗示されており、少年もまた生き残らなかった者である。作者であるカナファーニーも天使と同様、破局を見つめるしかない存在にすぎない。「否」の意思ゆえに生き残らなかった者は語ることができない。ナクバの語りはそうした意味あいを持つのである。

第5章「異郷(ゴルバ)と幻影(ファントム)」は、マスリの映画『シャティーラ・キャンプの子どもたち』(1998年)に登場する「幽霊」の存在を、異郷というテーマを経由しつつ、ベイルートからフランスに渡った作家ガーダ・サンマーンの短編集『四角い月』(1994年)に結びつける。マスリの映画では、交通事故によって障害を持った少年イーサーが「幽霊」との対話をまるで生者と交わした会話のように語る。彼が他の子供たちの輪から外れていたからこそ「幽霊」の存在に気づくことができるのである。異郷(ゴルバ)はアラブ文学の主要なモチーフの一つであり、異郷(ゴルバ)文学は、現代アラブ社会と西欧の植民地支配との関わり合いのはざまを描く。サンマーンの『四角い月』所収10篇は「異邦人」＝「幽霊」として異郷に生きる作家の、異郷で市民たり得ない「孤独」を描く。パリという「異郷(ゴルバ)」のアラブ人の生／死を幽霊譚として表したのである。ひるがえって、生を脅かされて「孤独」を嘆くことすらできないパレスチナ人からみれば異郷の「孤独」を嘆くということすら特権的な行為である。『四角い月』のなかの「私はアラブ女ではない」にはそうした特権性の自覚が見えると著者は言う。

第6章「ポストコロニアル・モンスター」では文字通り「怪物」がテーマとなっている。エジプト革命前後を舞台とするユーセフ・イドリースの『黒い警官』(1962年)は、体制・反体制の双方

1) Godard, Jean-Luc. *Notre Musique*(スイス / フランス, 2004年)、邦題は『アワーミュージック』。映画のなかで、パレスチナ詩人マフムード・ダルウィーシュは「私は公認されなかった民族の子供だからこそ／不在の名において語りたかったのだ／トロイの詩人として／勝利より敗北のなかにこそより多くの示唆と人間性が存在する」と言い、勝者の側からは語られない、敗者の声を拾うことの重要性を説いている。

が暴力によって人間性を失う現実を描く。「黒い警官」と呼ばれ、あらゆる手段で拷問を行った体制側のアッバース・アルザンファリーと、彼に拷問を受けたせいで別人のように変貌した（かつての）革命家シャウキー。権力／暴力関係で明らかに2つの階層をなしていたふたりがともに同じような「獣」へと変わってしまった。植民地の暴力が、独立後もその記憶をぬぐい去ることのできない「モンスター」を生みだしたことを描くこの作品は「ポストコロニアル文学」の一作であると評価されている。

第7章「背教の書物」では、イドリースの小説における、イスラーム社会の根幹をなす価値観「ハラール／ハラーム」を問題にし、人間にとって真の「禁忌（ハラーム）」とは何かについて考察する。『肉の家』（1971年）は、盲目のコーラン読みと再婚した女性が、自分の三人の娘たちと夫が性的な関係を結ぶことを知る物語である。『肉の家』におけるコーラン読みの「禁忌（ハラーム）」を断罪したエジプトの批評家ハイカルの一般的な道徳を代表する立場に対し、著者は、結婚適齢期にある娘たちの「生／性」への渇望を認める母親を描いたこの作品のなかに「禁忌（ハラーム）」そのものへの疑義を読み取る。『肉の家』で娘たちの振る舞いは「禁忌（ハラーム）」なのかと問い、『アル＝ハラーム』（第8章で詳説される）でアジーザの振る舞いは「禁忌（ハラーム）」なのかという問うイドリースの小説が結果的にイスラームへの「背教」の物語となっている可能性が指摘されている。

第8章「大地に秘められたもの」ではユーセフ・イドリースの『アル＝ハラーム』（1959年）に登場するエジプト農民が「サバルタン」として採りあげられる。病に倒れた夫のため季節労働者として働く農村の女性アジーザが、地主の息子に犯され身ごもり、子どもを産み落とした後その嬰児を殺め、産後の熱で亡くなるというわずか1章のエピソードが物語の核をなし、アジーザの「性」と「存在」がエジプトの大地や祖国の隠喩として描かれる。イドリースが行ったサバルタン女性の表象への挑戦に著者は一定の評価を与えつつも、アジーザの「性」をエジプトの無産労働者たち、ひいては植民地支配されているエジプトの大地そのものに重ねて描くときに抜け落ちるものがあると指摘する。サバルタンは表象されてしまうとすでにサバルタンではなくなる。アジーザ＝サバルタン女性はエジプトを主体的に代表する存在ではない。その意味でイドリースが描くサバルタン女性は、男性作家によって横領されているとも考えられるのである。

第9章「コンスタンティーヌ、あるいは恋する虜」では、パリに暮らすアルジェリア人画家ハーレドと、彼の友人で祖国の英雄であるスィ・ターヘルの娘アフラーム（アラビア語で「さまざまな夢」を意味する）の成就しえなかった「恋愛」を描いたアフラーム・モスタガーネミーの『肉体の記憶』（1993年）が、一見純粋な恋愛小説でありながら、「独立革命世代へのオマージュ」であると述べられる。フランスからの独立を求め、自らの命も顧みず闘って勝ち取った夢にまで見たアルジェリアの独立が政権の腐敗と独裁に陥り内戦へ向かう。歴史はその夢が甘美な「夢」に過ぎなかったことを明らかにする。アルジェリアではフランス語で小説が書かれることが多いなかで、なぜモスタガーネミーが1993年にアラビア語で小説を発表したのかという、マシュリクでは喚起されない問いが成り立つ。その理由はこの作品が「独立革命世代へのオマージュ」だということにある。言い換えれば、『肉体の記憶』はポストコロニアルを生きる女性作家としての娘から革命を生きた父の世代の記憶にささげられたオマージュなのである。

第10章「アッラーとチョコレート」（この章名はトマス・グティエレス・アレア監督『苺とチョコレート』のもじりである）は、ムスリム女性の性をムスリム女性自身が描くことの意味を問う。アリーファ・リファアト『遠景のミナレット』（1985年、短編集）は同世代のナワール・エル＝サァダーウィーら女性知識人による、西洋的な視点「フェミニズム」で家父長制をはじめとする男性社会に

切り込もうとする姿勢とは一線を画し、男性中心主義を批判する基盤が「イスラーム」にある。彼女にとって女性の不幸の原因はイスラームの教えが正しく守られていないことなのである。それゆえ、社会の圧倒的多数の女たちがムスリム女性として生きる、その内的世界を描くことで、アラブ女性文学の可能性を切り拓いたと評価される。リファアトが描く「生／性」を充溢させる生き方を求める女性がイスラームに帰依する姿は、真の信仰を持つことなく女性を蔑視し理解しようともしない男性を批判し、一方、イスラーム社会における女性差別からの解放という西洋の（啓蒙的）言説にも「否」を突きつけている。そして彼女の作品には、その一面として、フェミニスト的でもなくイスラーム的でもない、「サバルタン」女性たちのありのままの姿を描く側面があり、著者はそこにもリファアト文学の魅力を見出している。

第 11 章「越境の夢」は、アラブ小説あるいはそれをもとにした映画のなかで、フェミニスト知識人とサバルタン女性の対立がどのように語られ、どのように脱構築されているかを探る。ミシェル・クレイフィー監督『豊穣の記憶』（1980 年、この映画はサハル・ハリーフェの『ひまわり』を下敷きにしている）における、作家サハルと農民ルミア、ナワール・エル＝サァダーウィー『零度の女』（1973 年、日本語版は『0 度の女－死刑囚フィルダウス』）における、西洋教育を受けた精神科医の「私」と男性を殺したが故に死刑宣告を受けた娼婦フィルダウスの関係、ファーティマ・メルニーシー『越境の夢』（1973 年、日本語版は『ハーレムの少女ファティマ』）における、後にフランスに留学して作家になった少女「ファティマ」と、子ども時代を過ごしたモロッコのハーレムの女たちの関係はほぼ同一である。アラブのフェミニスト作家がフェミニスト知識人とサバルタン女性を対立的に作品に登場させるのは、サバルタンを表象することの困難さおよび自らがサバルタンを表象する特権性を有していることを知っているからである。そうすることで彼女たちは、自らの無知を作品に組み込んでいるのである。

第 12 章「記憶のアラベスク」は「パレスチナ系イスラエル人」を描いた作品を紹介する。パレスチナ人と言えば、ほとんどの場合、難民となったパレスチナ人を指し、イスラエル在住のパレスチナ人はほとんど語られてこなかった。イスラエルのパレスチナ人、アントーン・シャンマースがガルシア･マルケス『百年の孤独』を意識して書いた､一族の百年にわたる物語『アラベスク』（1986 年）では、さまざまなエピソードが数珠のようにつながってゆき、入れ子細工のように絡み合うなかで､「語る」主体の確実性・堅牢性が無効にされる。そこにはさまざまな人間が語りの主題として参入しており、それを作者という語る主体が統合することはないのである。この作品がもつ意味合いの一つは､「大文字のナクバ」の記憶から漏れてしまったパレスチナ人の物語であることにあるが、むしろ著者はアラビア語で書こうと思えば書くことができたシャンマースがヘブライ語でこの小説を書いたのはなぜかと問うことで別の側面をあぶりだす。シオニズムという単一の物語に縛られたヘブライ語文学の伝統のなかにパレスチナ人の「小さな」物語を刻みつけられること、そのことによってヘブライ語文学が豊かになっていくこと（を作者が意図したこと）、それこそが『アラベスク』がもつ重要な側面だと著者は考える。

第 13 章「祖国と裏切り」は､「正史」の語りにより隠蔽されてきた「裏切り者」について言及し、アラブ文学、特にパレスチナ文学における裏切りのモチーフを採りあげる。「ナクバの記憶」がシオニズムのナショナル・ヒストリーに抑圧されるのと同様、パレスチナ＝祖国という枠組みのなかでは、祖国の至高性を否定することは裏切りであり、隠蔽されるべきものである。生き延びるために敵の協力者となり「裏切り者」となった人びとの物語はナショナリズムの「正史」たりえない負の記憶である。著者は、そうした「裏切りの物語」が「歴史」の一部として記憶されることで、至

高の祖国とは別の祖国が拓かれていく可能性を見ている。自らの欲望を貫き、愛する男を殺し、そしてその家族に殺された女性や、解放闘争の英雄を見捨てた妻を描いたエリヤース・ホーリーの『太陽の門』（1998年）は祖国の至高性を否定した「裏切りの小説」であり、その意味で、逆に祖国とは何かを問う作品である。

第14章「ネイションの彼岸」では引き続き、ホーリーの『太陽の門』が題材となる。ホーリーが、1948年のパレスチナ人の悲劇を描いた文学作品は存在しない、と言うとき、それは何を意味するのか。すでにガッサーン・カナファーニーの諸作がそれを扱っているにも関わらずである。そこには13章の主題と同じナショナル・アイデンティティの問題が深く関っている。ガッサーン・カナファーニーの『ハイファに戻って』（1969年）ではたしかに、パレスチナ人でありながらイスラエル人に育てられた主人公の息子によって、アイデンティティの重層性が表現されている。しかしながらその作品では、イスラエル人か、パレスチナ人かという二者択一が否応なしに迫られている。著者はそこにホーリーが意図していたものを見出す。『太陽の門』には、ドイツ生まれでユダヤ教徒であったという意味でユダヤ人であり、改宗してムスリムとなったサラという人物が登場する。彼女は、パレスチナ人と結婚し、祖国を喪失した夫、その子供たちと占領下で生きることによって「パレスチナ人」となった。ホーリーは、自らの生き方によって「何人にもなれる」という可能性を描くことで新たな未来のネイション、個々の人間が複数性に開かれているネイションを想像／創造している、と著者は言う。

第15章「非国民の共同体」はいわば本書のまとめにあたり、本書の題名にもある「祈り」の意味が明かされる。この章ではあえてアラブ文学ではなく、済州島4・3事件犠牲者の慰霊の儀式の場面から議論が展開する。その事件の当事者ではない役者たちが事件を再現しながら、悲嘆の声をあげる、そのことに文学の可能性を著者は感じとる。いわば「他者」である役者は祈りを捧げているのだが、その祈りは、当事者でないからこそ捧げることができる。祈りは、済州島4・3事件という出来事に対しては無力である。しかし無意味ではない。それと同じように小説は出来事を後付けで記述するしかないので当の出来事に対して無力である。孤独や困難のなかにいる者へはほとんど届くことがない「祈り」。また小説という「祈り」によって彼／彼女たちの現実に変化がもたらされるわけでもない。現実に起こっている悲劇に小説は無力である。しかし無意味ではない。このようにして「アフリカで飢えている子どもたちを前にして文学に何ができるのか」（サルトル）に対して、「小説は祈ることができる」と返すことができる。これは、かつて武満徹が「（曲を）作ることは祈りである」と言ったことにも共鳴する精神であろう。では「祈る」ことの意味は何か。「同胞を見舞った苦難、その苦難を免れえた自分、五臓を引き裂くようなその痛みが作家に小説を書かせるのだとしても、死者たちの痛みと夢を分かち持つかぎりにおいて私たちはみな、このようなことが決して起こらないこととしての祖国と、起こらなかったけれども起こりえたかもしれない別の世界の可能性を想像する共同体の一員となるだろう」（p.307）と著者は最後に締めくくる。そして筆者はこれを「非在の贖い」と呼ぶ。

*

以上のように、本書全体を通して、文学における「ナクバの語り」と、それに関わる「女性」・「サバルタン」の表象という問題が繰り返し検討されている。著者は「民族の歴史（ナショナル・ヒストリー）」として機能する「ナクバ」を「大文字のナクバ」（Nakba）、それに対し個人の「生」を描くことを「小文字のナクバ」（nakba）としている（p.276）。その「小文字のナクバ」とはいわば「サバルタンのナクバ」である。ガヤトリ・スピヴァクは、自分たち自身を語ることができない「サバ

ルタン」を「代表」するのではなくその「物語」を「現前／表象」することは、（女性）知識人に課せられた責務であると述べた［Spivak 1998: 116］。

パレスチナ人のナクバの記憶を回復し、ナショナル・ヒストリーから排除された「サバルタンのナクバ」を掘り起こすだけではなく、ネイションを越えて、世界中のあらゆる地域で存在した、もしくは進行する個々の生を脅かす悲劇を改めて「ナクバ」として捉え、他者の生や痛みを共有すること、これが著者の語る「祈り」である。

著者にとって「女が書く」こと、もしくは「女を描く」ことは常に重要なテーマである。日本語でも多数翻訳されているナワール・エル＝サァダーウィーの作品のみならず、アルジェリアのアフラーム・モスタガーネミーやパレスチナのリヤーナ・バドル、エジプトのアリーファ・リファアトなど、日本語未訳の中東アラブ世界各地域の女性作家の作品が本書で採りあげられている[2)]。

本書の課題のひとつに、扱った作品の地域に偏りがあること（イラクや湾岸地域の作品が取り上げられていない）が挙げられる。しかし、本書によって日本語訳が存在しないアラブ文学の作品世界に触れることができた。また、中東アラブ世界の多様性をまさしく示すように、非アラビア語作品や映画まで含めて紹介・批評したことには大きな価値がある。

著者の関心は、現代において「文学に関わる」意味を問うことであった。著者の「祈り」とは何もできずに祈るのみという消極的な意味ではない。「祈る」ことで私たちはことばで結ばれ、共感し、連帯し、世界を共有することができる。だから、人間の尊厳を脅かされている人びとと「私たち」の双方にとって文学の価値が担保されるのである。こうした根源的な問いに真摯に向き合って書き上げられた本書は、個々の生のあり方にこそ価値を見いだす者にとって必読の書と言えようか。

ところで、2009 年に著者が中心となって「中東現代文学研究会」が起ち上げられた。これは「文学に何ができるか」というサルトルの問いに対して、その 60 年後に著者がたどり着いたひとつの返答である。この研究会は、今まで孤立しがちであった中東世界を対象とする文学研究者が集まり、議論・協力をすることによって、質の高い研究成果や翻訳を発表し、この問いに対する返答を重ねていく場になるであろう。

＊

最後に本書評に附して、イスラエル社会における「ナクバの記憶」に関する新たな潮流を紹介しておきたい。近年、イスラエルにおいて、かつては存在しなかった「ナクバ」のイメージが形成され始めている。きっかけとなったのは、1970 年代後半以降のイスラエル外交文書の公開である。一次資料から「建国神話」を再検討する研究者たち（彼らは「新しい歴史家」と呼ばれている）が登場したことで、イスラエル国内で建国史のタブーが議論されているのである。

1998 年イスラエル建国 50 周年を記念して、『復興（トゥクマ）』という 22 時間にわたるドキュメンタリー番組が国営テレビ局によって制作された。番組制作の時点で「新しい歴史家」が関わったこともあり、それまでユダヤ民族の「解放」としか捉えられてこなかった 1948 年の出来事が「戦争」であったとし、実質的にパレスチナ人が追放されたことを示した。

アモス・ギタイは映画『東方へ（ケドマ）』で、イスラエル建国直前の出来事を、ヨーロッパを追放されたユダヤ移民開拓の「苦難の歴史」として描くと同時に、パレスチナ難民の「追放の歴史」という、シオニスト神話が隠蔽する「負」の歴史をも描いた[3)]。

2） 1970 ～ 80 年代にかけて刊行された「現代アラブ小説全集」（河出書房新社、全 10 巻）が、アラブ文学の名著を翻訳しているものの、そのなかに女性作家が一人も採りあげられていないことを、既刊『棗椰子の木陰で』で著者はすでに指摘している。［岡 2006: 166］

3） Gitai, Amos. “*Kedma*”(フランス／イスラエル、2002 年)。映画の最後の場面で、ユダヤ人移民たちにロバを奪われたパレスチナ農民が、突如『悲しいオレンジの実る土地』の冒頭を朗唱する。もちろん、映画の舞台はイスラエルが建国する前であり、その当時、カナファーニーのこの作品自体は存在していない。しかしギタイ監督はあ

また、カナファーニーの『ハイファに戻って[4)]』（1969年）はいま現在のイスラエル文学に生き続けている。2008年春ボアズ・ガオンよって『ハイファに戻って』がヘブライ語戯曲となった。テルアビブ市立カメリ劇場での初演は、くしくも主人公のサイード・S夫妻が息子を置き去りにしてからちょうど60年後の1948年4月21日であった。イラク系作家サーミ―・ミハエルの『トラファルガー広場の鳩』（2005年）は『ハイファに戻って』の変奏曲(ヴァリエーション)として書かれた。

パレスチナ系イスラエル人として「小文字のナクバ」を描いたシャンマースは、ホーリーの『太陽の門』ヘブライ語版に編集者として関わり、エミール・ハビービーの『悲楽観屋サイードの失踪にまつわる奇妙な出来事』のヘブライ語訳をも手がけている。

こうして、パレスチナ系イスラエル人、ユダヤ人によって新たな「ナクバ」のイメージがヘブライ語で語られようとしている。彼らは「ユダヤ国家」イスラエルにおいて決して主流派とはなりえない。しかしながら、これはシオニストたちの「語り」の前に「記憶の抹殺(メモリサイド)」されてしまった、「負の歴史」としての「ナクバの記憶」を検証していこうとするイスラエル側の試みとして評価すべきであろう。

【参考文献】

岡真理『棗椰子の木陰で――第三世界フェミニズムと文学の力――』、青土社、2006年
Sartre, J=P., Beauvoir, S. de. 他／平井啓之訳『文学は何ができるか』、河出書房新社、1966年
Spivak, G.C. ／上村忠男訳『サバルタンは語ることができるか』、みすず書房、1998年
Pappe, Ilan., “Israeli Television’s Fiftieth Anniversary “Tekkuma” Series: A Post-Zionist View?”, *Journal of Palestine Studies*, XXXVII, no.4 (Summer 1998), pp.99–105.

【付録】
本書で採り上げられた小説・詩の翻訳文献リスト
（日本語、英語で読むことができるもの。和訳があるものは、英訳のリストから省いている。）
《和訳》
イシグロ、カズオ／土屋政雄訳『わたしを離さないで』、早川書房、2005年
イドリース、ユーセフ／奴田原睦明訳「黒い警官」「肉の家」、『中国・アジア・アフリカ／集英社ギャラリー「世界の文学」20』、集英社、1991年
イドリース、ユーセフ／奴田原睦明訳『ハラーム（禁忌）』、第三書館、1984年
カツェネルソン、イツハク／飛鳥井雅友・細見和之訳『滅ぼされたユダヤの民の歌』、みすず書房、1999年
カナファーニー、ガッサーン／奴田原睦明訳『太陽の男たち／ハイファに戻って』、河出書房新社、2009年
カナファーニー、ガッサーン／岡真理訳「ラムレの証言」、『前夜』、2005年4月
カナファーニー、ガッサーン／岡真理訳「悲しいオレンジの実る土地」、『前夜』、2006年夏
カナファーニー、ガッサーン／岡真理訳「ハイファに戻って」、『前夜』、2006年秋～2007年夏
カナファーニー、ガッサーン／岡真理訳「まだ幼かった、あの日」、『前夜』、2005年夏

えてこの部分を語らせることで「ナクバ」を映画に記録した。
4）イスラエルでは2001年にヘブライ語訳が出版されている。

サーダウィ、ナワル／鳥居千代香訳『0 度の女：死刑囚フィルダウス』、三一書房、1973 年
ハビービー、エミール／山本薫訳『悲楽観屋サイードの失踪に関する奇妙な出来事』、作品社、2005 年
マフフーズ、ナギーブ／池田修訳『アルカルナック』、アジア経済研究所、1978 年
メルニーシー、ファーティマ／ラトクリフ川政祥子訳『ハーレムの少女ファティマ：モロッコの古都フェズに生まれて』、未来社、1998 年（原題は『越境の夢』）
ヤシーヌ、カテブ／島田尚一訳『ネジュマ』、現代企画室、1994 年

《英訳》
Badr, Liyana. *The Eyes of the Mirror*, Garnet Publishing Ltd: Berkshire, 2008.
Badr, Liyana. *The Balcony over the Fakihani*, Interlink Books: New York, 2002.
Darwish, Mahmud. "The Earth is Closing on Us", in *Victims of a Map*, Al Saqi: London, 2006.
Khalifeh, Sahar. *The Wild Thorns*, Saqi Books: London, 2005.
Khoury, Elias. *The Gate of The Sun*, Picador: New York, 2005.
Mosteghanemi, Ahlam. *Memory in the Flesh*, American University in Cairo Press: New York, 2003.
Rifaat, Alifa. *Distant View of a Minaret*, Heinemann: London, 1987.
Samman, Ghada. *The Square Moon*, University of Arkansas Press: Fayetteville, 1998.
Shammas, Anton. *Arabesques*, University of California Press: Berkeley, 2001.

（細田　和江　中央大学政策文化総合研究所・準研究員）

Jeroen Gunning. 2008. *Hamas in Politics: Democracy, Religion, Violence*. New York: Columbia University Press, xiv + 320pp.

イスラーム抵抗運動（Ḥaraka al-Muqāwama al-Islāmīya: Ḥamās, 以下「ハマース」）については、1987 年の結成以来、多数の研究がなされてきた。特に 2006 年 1 月にパレスチナ自治政府の立法機関である立法評議会の第 2 回選挙に参加し、パレスチナ解放運動（Ḥaraka al-Taḥrīr al-Waṭanī al-Filasṭīnī: Fataḥ, 以下「ファタハ」）に対して地すべり的勝利を収め、それに呼応して研究の数も急増した。その中で本書は、既存の先行研究を周到に整理した上で、著者自身の政治社会学的な理論的考察、ならびに長期に渡るフィールド調査の成果を総合し、ハマース研究における今日的な到達点を示す研究として高く評価できるものである。

著者ジェロアン・ガニングは、イギリスのアベリストウィス大学の「急進化と現代の政治的暴力研究センター」の所長代理であり、また同大学国際政治学部のテロリズム研究・中東研究の講師である。博士号をダラム大学から取得した著者は、ガザ地区やレバノンで長期にわたるフィールド・ワークを行ってきた。イスラーム主義の社会運動、特にハマースとヒズブッラー（Ḥizb Allāh）を事例に、民主化、宗教、暴力の相互作用を研究の中心として扱っている。

本書は、パレスチナにおける対イスラエル抵抗運動であり、イスラーム主義運動であるハマースを対象とする。1980 年代に武装闘争の準備、部分的な展開を行っていたムスリム同胞団のパレスチナ支部が、87 年のインティファーダ（民衆蜂起）に際して闘争部門として結成したのが同運動